

自分を見つめ、よりよい生き方についての考えを深める道徳学習指導に関する開発的研究Ⅱ

— 共によりよい生き方について考えるよさを実感する学習内容の設定 —

永田 佑 [鹿児島大学教育学部附属小学校]

榊 将和 [鹿児島大学教育学部附属小学校]

上ノ町 亮 [鹿児島大学教育学部附属小学校]

Developmental research on moral learning guidance to self-judge and deepen one's consideration of a better way of life Ⅱ:
Learning contents setting to help students realize the advantages of thinking about a better way of life together
NAGATA Yu, SAKAKI Nobukazu and UENOMACHI Ryo

キーワード：自分を見つめる、よりよい生き方についての考えを深める、共に考えるよさを実感する学習内容

1. 研究の目的

1.1. 研究の背景

道徳教育は、生産年齢人口の減少、グローバル化の進展や絶え間ない技術革新等が進む中、社会の変化に対応し、その形成者として生きていくことができる人間を育成する上で、重要な役割をもっている。その要となる「特別の教科 道徳」（以下「道徳科」という。）において、子どもたちが「どのように生きるべきか。」という問いをもち、より主体的に自分を見つめ、他者と関わり合いながら自分の生き方についての考えを深めていくために、道徳科授業を充実改善していく必要があると考え、初年度研究を行った。

初年度研究においては、「自分を見つめ、よりよい生き方についての考えを深める子ども」を育てていくために、道徳科で育む資質・能力を整理し、自分を見つめ、よりよい生き方についての考えを深める道徳科授業の捉えを明らかにすることで、授業創造の基本的な考え方を見いだした。

まず、自分を見つめ、よりよい生き方についての考えを深める道徳科で育む資質・能力を表1のように整理した。次に、自分を見つめ、よりよい生き方についての考えを深める道徳科授業を「自分を見つめて考えていきたい問いをもち、互いの多様な価値観を受容したり、自分の生活とつなげて考えたりしながら道徳的価値観を再構成し、よりよい自分の生き方についての考えを深める授業」と捉えた。

そして、このような道徳科授業を具体化するために、次の2つを重点にして学習指導を行った。

【重点1】自分を見つめ、問いをもたせる働きかけの具体化

【重点2】再構成した道徳的価値観を基に、よりよい自分の生き方についての考えを深めるための働きかけの具体化

表1 自分を見つめ、よりよい生き方についての考えを深める道徳科で育む資質・能力

知識及び技能	思考力, 判断力, 表現力等	学びに向かう力, 人間性等
道徳的価値を自分の生活との関わりで理解すること	自分を見つめ, 他者との関わりの中で, 多様な価値観を受容し, 自らの体験場面での内面と関係付けて類推しながら考え, 表現しようとする力	自分自身のもつ心の葛藤を乗り越えたり, 道徳的価値の理解を深めたりしながら, 主体的に, 粘り強くよりよい生き方を目指していこうとする態度

初年度研究を通じた成果として、多様な価値観を前提に、自分の価値観と他者の価値観を比較しながら問題意識をもち、大切にしたい考えの理由を明らかにして交流することで、自分の生き方についての考えを深めようとする子どもの姿が見られた。一方で、子どもによっては、自分の価値観に固執してしまい、他者の価値観を受容したり、自分の生活とつなげて考えたりすることができないといった課題が見られた。この課題の要因としては、学習内容を設定する際に、日常生活でもつ問いを想定した児童の実態分析を基に、指導内容の要点や教材と照らし合わせる事が十分にできなかったこと、自分がこれから大切にしていきたい考えの理由を考えさせる際、子どもの経験や体験場面での心情と結び付けて考えさせたり、友達と交流させたりする際の働きかけが十分でなかったことであると整理した。

これらの要因から、これまで以上に子どもが自分との関わりで問いをもち、他者と関わり合いながら自分なりのよりよい生き方についての考えを深める必要があると考えた。

1.2. 研究の方向

自分を見つめ、よりよい生き方についての考えを深める道徳科授業では、これまでの自分を見つめたり、他者と関わったりしながら多様な考えに触れ、自分にとって大切にしたい考えやよりよい生き方につながる考えなどを見だし、自分の生き方についての考えを深めることができる子どもを育てることを目指している。

これまで以上に、子どもが自分との関わりで問いをもち、他者と関わり合いながら自分なりのよりよい生き方についての考えを深めるためには、まず、子どもがもつ自分なりに考えていきたい問いが、観念的なものではなく、より自分事として捉えた切実感のある問いであることが重要である。次に、自分事として捉えた切実感のある自分なりの問いを解決するために、一つの考えに固執するのではなく、学び合う中で、他者の多様な価値観に触れることによって様々な視点から物事を考え、自分の大切にしたい考えとして道徳的価値観を再構成していくことが必要である。そして、再構成された道徳的価値観を基にして、「自分はこれからどう生きるのか。」「何を大切に生きて生きるのか。」といった自分の生き方についての考えを深めていくことにつなげることが大切である。

そのためには、子ども自ら、自分にとって大切にしたい考えやよりよい生き方につながる考えを見だし、他者と共に考えるよさを実感することができるような授業改善を行うことが必要である。

そこで、まず、子どもが自分との関わりで問いをもち、他者と関わり合いながら自分なりのよりよい生き方についての考えを深める姿を具体的に設定する。次に、子どもが、共によりよい生き方について考えるよさを実感し、自分の生き方についての考えを深めることができる学習内容の設定の考え方を明らかにし、自分を見つめ、よりよい生き方についての考えを深める道徳科授業を具体化していく。

2. 研究の内容

2.1. 共によりよい生き方について考えるよさを実感する子どもの姿

(1) 共によりよい生き方について考えるとは

共によりよい生き方について考えるとは、自他共に調和的な生き方を目指し、「自分はこれからどう生きるのか。」「何を大切に生きていくのか。」といった自分なりのよりよい生き方について、他者と関わり合いながら考えることである。

共によりよい生き方について考えるためには、子どもが、人間としてよりよく生きる上で必要な道徳的価値を自分事として感じたり考えたりする必要がある。その際は、他者と対話しながら多様な価値観に触れ、それらを受容することによって様々な視点から物事を考え、自分の大切にしたい考えとして道徳的価値観を再構成し、よりよい自分の生き方についての考えを深めていくことが大切である。

(2) 共によりよい生き方について考えるよさを実感する姿とは

共によりよい生き方について考えるよさを実感する姿とは、「〇〇するとき、□□な気持ちになるけど、☆☆を考えるといいと思うよ。」「AさんやBくん、Cくんの考えを聞いて、今まで気付かなかったことを考えることができたよ。」というように（図1）、よりよい生き方についての考えを自分との関わりで深めたり、他者との学び合いのよさを感じたりしている姿であると捉えた。つまり、道徳的価値を自分との関わりで見つめることによって切実感のある問いをもち、その問いを解決するために他者と学び合うことで、新たな問いをもったり道徳的価値が自分にとって大切な理由を自分の経験から具体的に想起したりすることである。

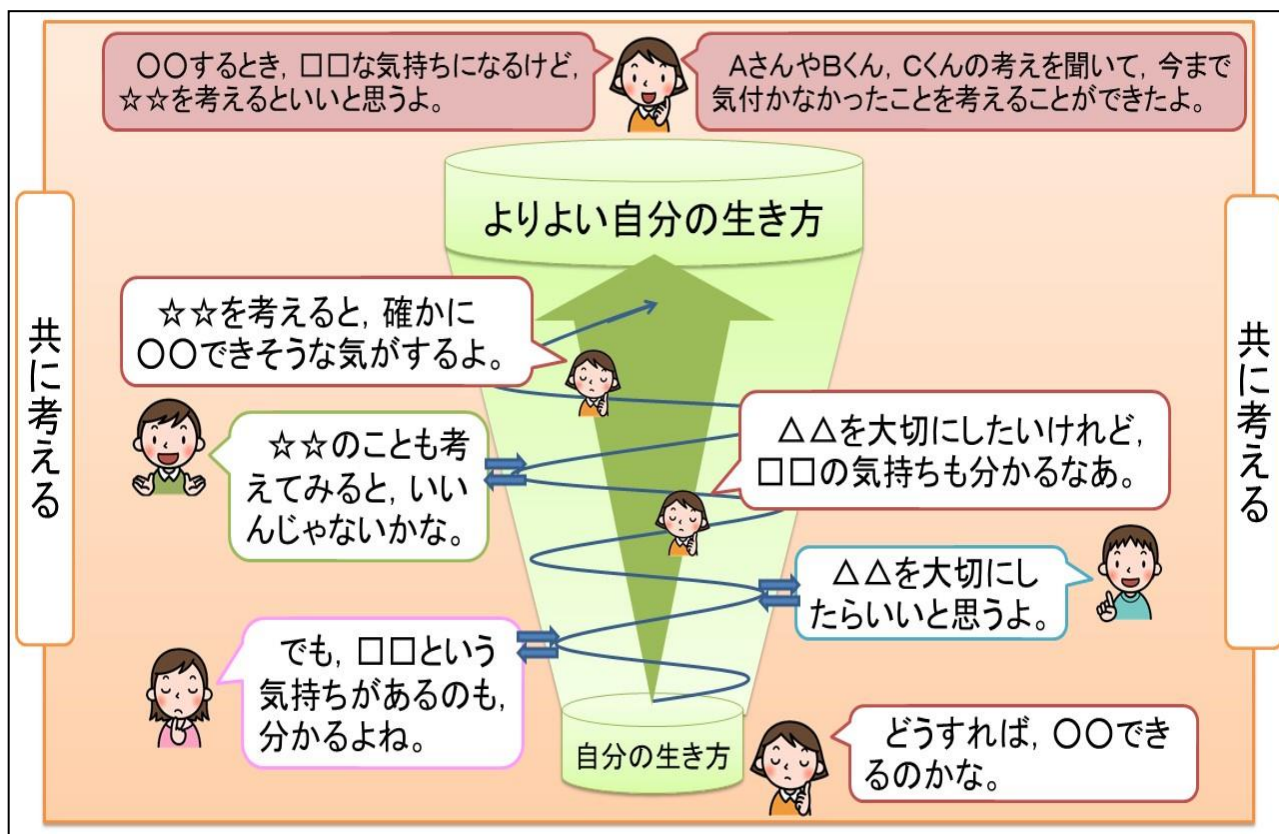


図1 共によりよい生き方について考えるよさを実感する子どもの姿

2.2. 共によりよい生き方について考えるよさを実感する学習内容設定の基本的な考え方

(1) 共によりよい生き方について考えるよさを実感する学習内容とは

以上を踏まえ、子どもが、共によりよい生き方について考えるよさを実感する学習内容とは、自分との関わりで問いをもち、他者と学び合う中でよりよい自分の生き方についての考えを深めることができるものでなければならないと考える。

(2) 共によりよい生き方について考えるよさを実感する学習内容の要件

子どもが、他者と学び合う中で、よりよい自分の生き方についての考えを深めるためには、道徳的価値を自分の経験や体験場面での心情と関係付けて、考えていきたい問いをもつことができる内容であることが重要である。また、多様な価値観が表出され、比較したり受容したりすることができるような内容であることも重要である。さらに、多様な価値観に触れながら、よりよい自分の生き方についての考えを深めることができる内容が求められる。そこで、共によりよい生き方について考えるよさを実感する学習内容の要件として以下の3点を設定した。

- 自分との関わりで問いをもつことができる。
- 多様な価値観を比較したり、受容したりして考えることができる。
- よりよい生き方について、自分なりの考えを深めることができる。

(3) 共によりよい生き方について考えるよさを実感する学習内容を設定する手順

子どもが、共によりよい生き方について考えるよさを実感する学習内容を図2の手順で設定していく。まず、学習指導要領解説に示された指導内容の要点、望ましい生き方を支える見方・考え方・感じ方（意義・心構え）、望ましい実践を阻む心の弱さを分析する。次に、教材に含まれる道徳的価値を分析（教材分析）したり、道徳的価値に対して、どんな思いや課題をもっているのかを分析（児童の実態分析）したりする。さらに、指導の発展性や他の教育活動との関連を考慮したり、実際の授業における指導過程を分析したりして、計画的・発展的な学習内容を設定する必要がある。

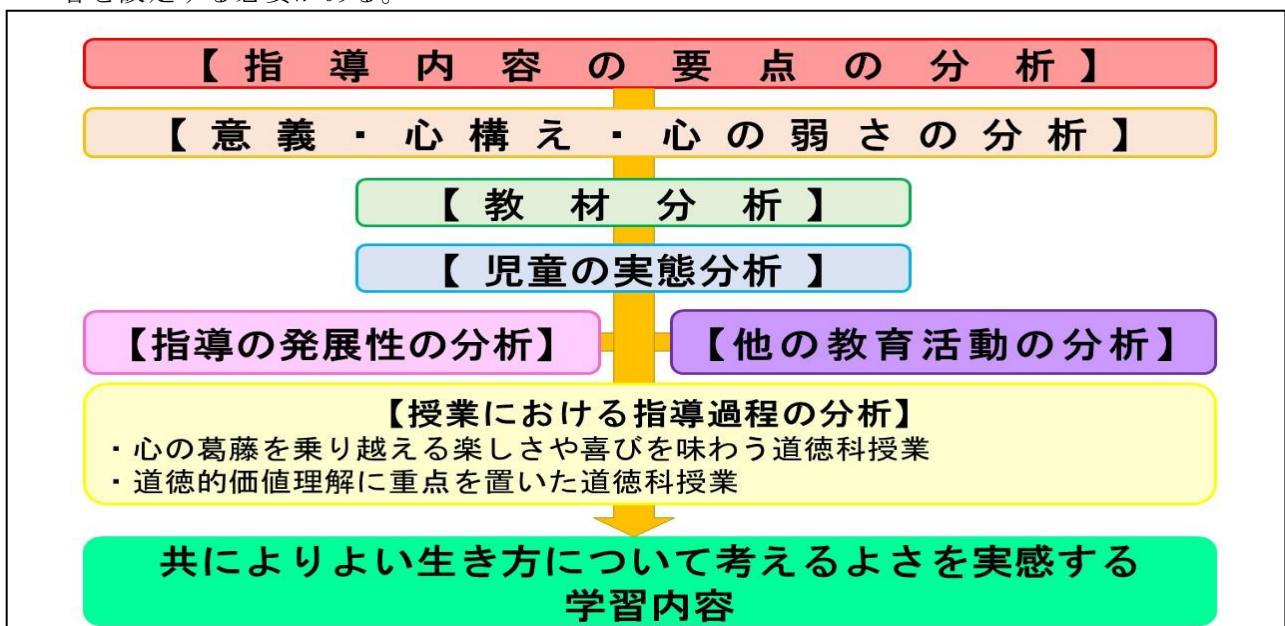


図2 共によりよい生き方について考えるよさを実感する学習内容設定の手順

(4) 共によりよい生き方について考えるよさを実感する学習内容設定の重点

共によりよい生き方について考えるよさを実感するためには、以下の2つに重点を置き、学習内容を設定していく必要があると考えた。

ア 子どもが問いをもつ様相を視点にした実態分析について

子どもが、自分との関わりで問いをもつためには、教師が子どもの日常生活でもつ道徳的な問いを具体化しておくことが必要である。そこで、一年次研究で明らかにした子どもが問いをもつ様相の6つの視点を活用して、一単位時間の授業において、子どもが日常生活でもつ問いを分析していく必要があると考えた。6つの視点で実態調査を行い、それらの結果から子どもがもつ問いの傾向を分析する。そして、それまでに分析した指導内容や教材と実態調査から分析した問いの関連性を考慮する。そうすることで、児童の実態に寄り添った、より切実感のある問いを子ども自身もつことができると考える。

また、自分が解決していきたい問いについて、子どもが日常生活を具体的に想起しながら自分の生き方についての考えを深めるためには、学習を通して見いだした大切にしたい考えから、再度自分の生活を見つめ直すことを意識できるようにすることが必要である。「どうして〇〇が大切なのか。」という問いをもっていた子どもは、自分の価値観と他者の価値観を比較したり、受容したりして、自分との共通点や差異点を明確にし、自分の生活を見つめ直すことができる。その結果、「自分も△△なことがあったな。」という自分の生活経験を想起し「△△な時に、□□な気持ちになったから、〇〇が大切なんだな。」といった自分の道徳的価値観を再構成することができる。このように、子どもが自分の解決していきたい問いをもち、自分が大切にしたい考えを見いだしながら自分の生活経験を想起できることで、よりよい生き方について考えるよさを実感できると考える。

イ 多様な価値観を比較、受容しながら考える学び合う活動の分析について

子どもは、他者の価値観に触れることで、自分が考えたことのない視点から自分の問いを考え直すことができたり、想起できていなかった自分の生活経験を思い起こすことができたりする。そこで、子どもが、どのように互いの価値観を比較したり受容したりしていくのかという学び合う活動の様相を具体的に分析しておくことが大切である。そうすることで、教師の働きかけもより具体化でき、子どもが、他者の考えやその理由を聞いてみたくなり、他者と共に考えるよさを実感し、自分が解決したい問いについての考えを深めていくことができると考える。

3. 研究の実際

3.1. 第4学年 主題名「友達とのよりよい関係とは」における学習内容について

(1) 指導内容の要点の分析、教材分析、児童の実態分析

まず、内容項目「友情、信頼」に関する指導内容と指導内容の要点を基に、本校において設定している意義・心構え・心の弱さの3観点で分析する（表2）。次に、教材分析及び児童分析を行う（表3）。

表2 指導内容の要点の分析

	低学年	中学年	高学年
指導内容	友達と仲よくし、助け合うこと。	友達と互いに理解し、信頼し、助け合うこと。	友達と互いに信頼し、学び合って友情を深め、異性についても理解しながら、人間関係を築いていくこと。
指導内容の要点	<ul style="list-style-type: none"> ・仲よく活動することの大切さを実感する。 ・友達と助け合っただけをよかったことを考える。 ・友達の気持ちを考える。 	<ul style="list-style-type: none"> ・友達のよさを見つけ、理解する。 ・友達とのよりよい関係の在り方を考える。 ・助け合うことで、友達の大切さを実感する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・互いに磨き合い、高め合う関係を築いていく。 ・互いのよさを認めて、支え合う。 ・異性に対しても互いのよさを認め合う。
内容分析	意義	<ul style="list-style-type: none"> ・自他共に嬉しい。 ・友達のよさが分かる。 ・信頼関係が深まる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・自他共に嬉しくなる。 ・信頼関係が深まる。 ・みんなが楽しく生活することができる。
	心構え	<ul style="list-style-type: none"> ・友達の気持ちを、よく考える。 ・自分のことだけ考えない。 ・友達を信じる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・友達を信頼する。 ・友達の気持ちや立場を考えて行動する。 ・よく考えて、正しく判断する。
	心の弱さ	<ul style="list-style-type: none"> ・自己中心的な考え ・好悪の感情 ・利害損得の感情 	<ul style="list-style-type: none"> ・羞恥心 ・利害損得の感情 ・思慮不足

表3 教材分析及び児童分析

教材分析	児童分析
ハンスは、デューラーの画家になるという夢のために働き、仕送りをする。デューラーは、ハンスのために寝る間も惜しんで勉強する。学び終えたデューラーは、ハンスのもとへ帰るが、筆の握れなくなった手に感銘を受け、絵に残すという内容である。友達を信頼することが難しいことに気付き、よりよい友達の在り方についての考えを深めることができる教材である。	本学級の児童は、活動範囲を広げつつ、自分と考えや趣味の合った友達と仲間集団を作りながら仲よく助け合おうとしてきている。しかし、自分の利害損得を考えてしまうことで、友達との関係を崩してしまうこともある。そこで、友達と分かり合ったり信じ合ったりすることの大切さを理解し、友達と互いに助け合おうとする態度を育てる必要がある。

(2) 自分との関わりで問いをもち、よりよい生き方についての考えを深めるための分析

本学級の児童の実態を、子どもが問いをもつ様相の6つの視点で分析した(図3)。その結果、子どもには、「友達とは、『何も言わなくても分かる関係』という人もいれば、『何でもしてあげられる関係』という人もいるのはなぜか。」「友達を信じることができる時とできない時があるのはなぜか。」といった問いが生まれていることが分かった。特に図3の下線部分に共通して見られる問いとして「どんな時でも友達を信じることができるか。」「友達より自分を優先してしまわないか。」といった問いがあることが分かった。したがって、どんな時でも友達と信頼し合う関係性について考えていくことにした。

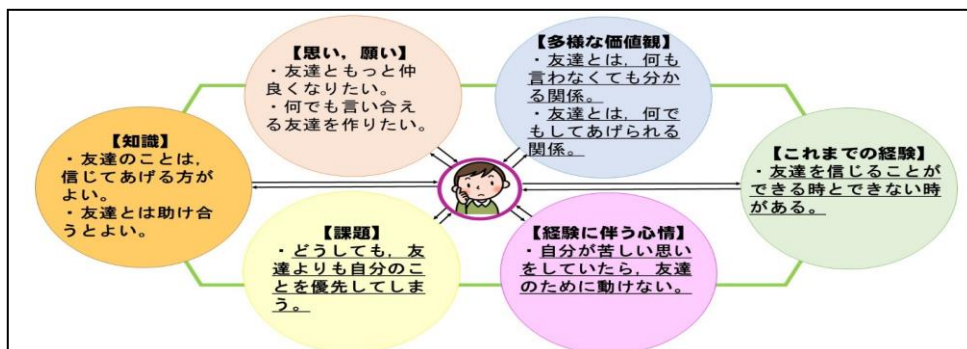


図3 「友情、信頼」において子どもが問いをもつ様相

(3) 指導内容，教材と児童の実態の関連（下線は，関連する部分）

表4 指導内容，教材，児童の実態の関連

	指導内容	教材	児童の実態
意義	<ul style="list-style-type: none"> ・<u>自他共に嬉しい。</u> ・友達のよさが分かる。 ・<u>信頼関係が深まる。</u> 	<ul style="list-style-type: none"> ・やっぱり信じてくれていたんだ。 ・嬉しい。 	<ul style="list-style-type: none"> ・<u>友達と分かり合うと気持ちがいい。</u>友達と協力すると、よりよいものがつくれるな。
心構え	<ul style="list-style-type: none"> ・<u>友達を信じぬこうとする気持ちをもつ。</u> ・<u>信頼される行動をとる。</u> ・相手のことをよく知ろうとする。 	<ul style="list-style-type: none"> ・<u>デューラーも頑張ると信じて自分も頑張ろう。</u> ・<u>ハンスが待っていると信じて寝る間も惜しんで頑張ろう。</u> 	<ul style="list-style-type: none"> ・<u>友達を信じてあげることが大切だな。</u>協力することが大切だな。
心の弱さ	<ul style="list-style-type: none"> ・<u>自分本位な考え。</u> ・<u>利害損得の感情。</u> ・自己中心的な考え。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ハンスも少しくらいなら遅くなっても<u>許してくれるだろう。</u> ・つらいから少しくらい休もう。 	<ul style="list-style-type: none"> ・<u>自分が苦しい思いをしていたら、友達のために動けないな。</u>

指導内容，教材分析，児童の実態分析をして見いだしたことを，再度照らし合わせることで，より児童の実態に寄り添った学習内容の設定につながると考える（表4）。

(4) 指導の発展性，他の教育活動，指導過程の分析

本時で，子どもに考えさせたい問いを指導の発展性，他の教育活動の視点から再度照らし合わせる（表5）。本校では，第4学年で「友情，信頼」の内容を3回設定している。子どもは，1，2回目まで，「相手を信頼すること」，「友達を理解するために大切な気持ちや考え」について学習してきた。そこで第3回では，図3の分析から見いだした，子どもが問いをもつ様相にある「友達とのよりよい関係」について考えることで，友達を理解したり信頼したりすることの意義を感じながらも，「自分が苦しんでいる時でも助け合えるような関係性」もあることに気づき，自分の日常生活における友達との関係性を見つめ直すことができると考える。さらに，この学習は，第5学年第1回の「友情，信頼」主題名「友との絆」で，「友の肖像画」について考える学習へと発展していく。

表5 本校における第4学年及び第5学年の「友情，信頼」の系統性

回数	実施時期	主題名，教材名	学習内容	指導過程	他の教育活動
第1回	6月	主最高の仲間 教なみだと笑顔の なでしこジャパン (学研教育みらい)	相手を信頼するとは，どういうことかを考える。	価値理解に重点	<ul style="list-style-type: none"> ・係活動 ・縦割り通子会 ・朝のボランティア活動
第2回	10月	主思い合う友達 教泣いた赤おに (学研教育みらい)	友達のことを理解するためには，どのような気持ちや考えが大切かを考える。	心の葛藤	<ul style="list-style-type: none"> ・集団宿泊学習 ・話し合い活動 ・ぼくたちのハンドボール（体育）
第3回	1月	主友達とのよりよい関係とは 教いのりの手 (学研教育みらい)	友達とのよりよい関係とは，どのような関係なのかを考える。	価値理解に重点	<ul style="list-style-type: none"> ・音楽発表会 ・友達といっしょに（図画工作）
第5学年 第1回	6月	主友との絆 教友の肖像画 (学研教育みらい)	どんな時でも，友達を信頼することの大切さについて考える。	価値理解に重点	<ul style="list-style-type: none"> ・大運動会 ・委員会活動

(5) 第4学年 主題名「友達とのよりよい関係とは」における学習内容

(1)から(4)の手順を踏まえ、以下のような学習内容を設定した。

- 「友達とのよりよい関係をつくるには、どうしたらよいのだろう。」「よりよい友達関係とはどのようなものだろう。」といった自分の経験と関係付けた切実感のある問いをもつことができる。
- 「友達なら信じ続けるべき。」「自分が苦しいときには、自分のことを考えてしまう。」といった多様な価値観を比較したり、受容したりしながら「相手を信じたり、自分が信じられる行動をとったりすることが大切だ。」といった自分にとって大切な考えを見いだすことができる。
- 「自分は考えたことが無いほどの友達関係もあるのだな。」「自分も疑う必要のない友達関係をつくりたいな。」といった自分の経験を想起しながらよりよい自分の生き方についての考えを深めることができる。

3.2. 第4学年「友達とのよりよい関係とは」(友情, 信頼)における実践

(1) ねらい

- ア 友達と互いに理解し、信頼し、助け合うことについて、「友達を信じぬこうとする気持ちをもつ」「信頼される行動をする」「共に嬉しくなる」などの意義や心構えの大切さについて、自分の生き方との関わりを通して理解することができる。
- イ 友達と互いに理解し、信頼し、助け合うことに関わる見方・考え方・感じ方を他者との関わりの中で、自らの体験場面での内面と関係付けて類推しながら考え、表現することができる。
- ウ 友達と互いに理解し、信頼し、助け合うことに関わる自分自身の生き方を見つめ、友達と信頼し合って助け合うことの大切さを理解し、それらを守っていこうとする気持ちを高めることができる。

(2) 本時の実際

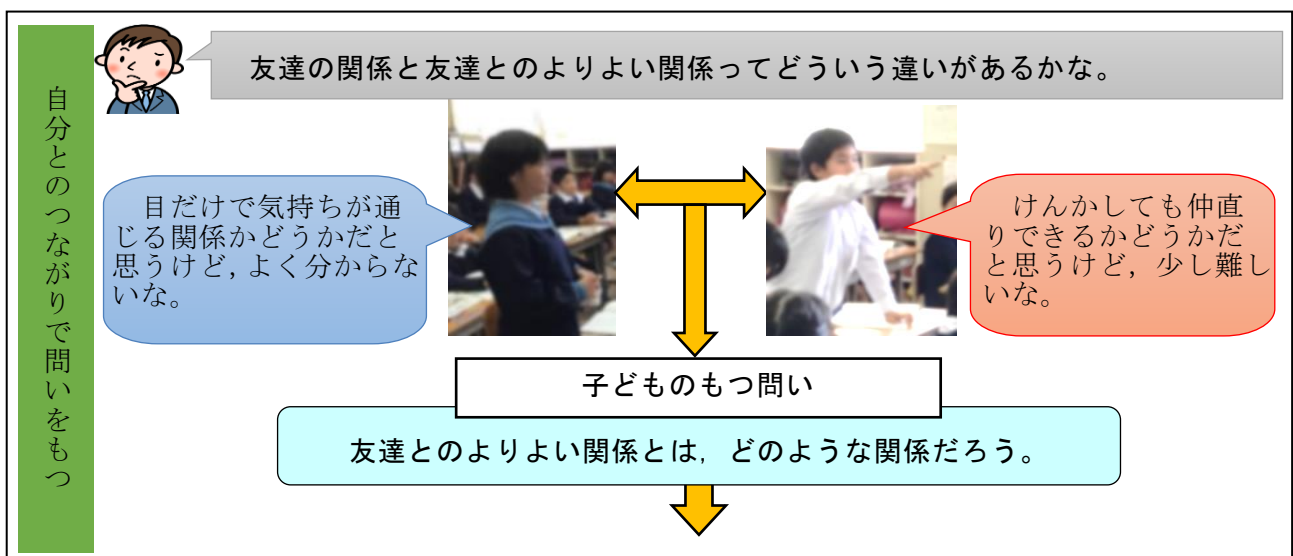
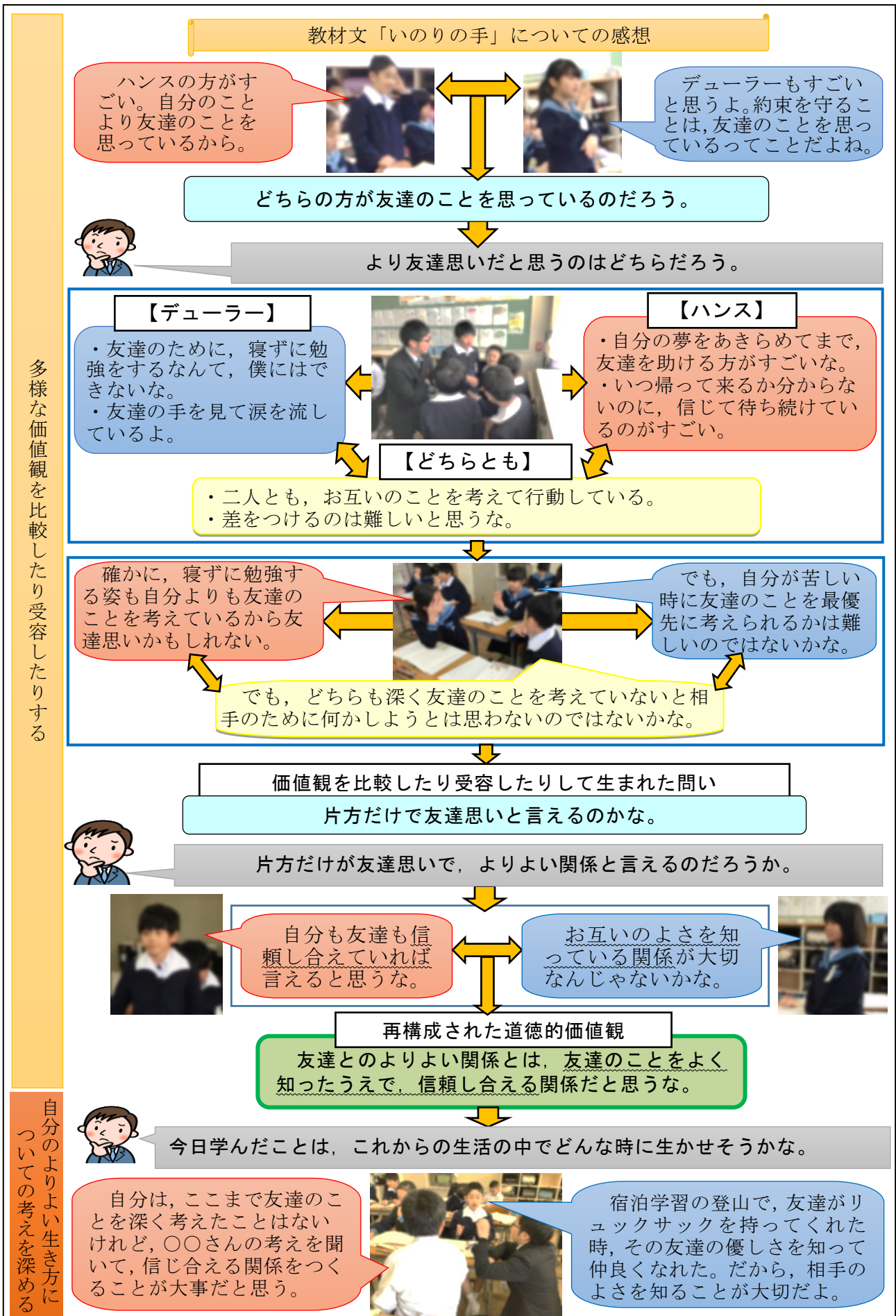


図4 本時の実際①



多様な価値観を比較したり受容したりする

自分のよりよい生き方についての考えを深める

図5 本時の実際②

3.3. 考察

児童の実態調査を、子どもが問いをもつ様相の視点で分析したことで、より児童の実態に寄り添った学習内容を設定することができた。また子どもが日常生活でもつであろう問いを設定したことで、「よりよい友達関係について考えたこともないな。どんな関係がよいのだろう。」といった自分の経験を想起した切実感のある問いをもち、多様な価値観を比較したり受容したりしながら学び合う姿が見られた。さらに、子どもの振り返りのように「宿泊学習の登山でリュックサックを持ってもらった。」といった経験と「相手のよさを知ることが大切だ。」といった再構成した道徳的価値観を関係付けながら、共によりよい生き方についての考えを深める子どもの姿が見られた。

4. 研究のまとめ

4.1. 研究の成果

- 道徳的価値を自分との関わりで捉え、自分なりの考えていきたい問いをもち、道徳的価値に対する多様な価値観を受容して考えを深めたり、比較して新たな問いを見いだしたりする姿が見られた。
- 大切にしたい考えを交流する中で、自分がこれからの生活の中で大切にしていきたい考えの理由を具体的に想起しながら、考えていきたい問いに対する自分なりの考えを生活経験と照らし合わせて振り返る姿が見られた。

4.2. 研究の課題

- 児童の実態に寄り添った発問設定や学び合う活動といった指導方法を工夫することで、子どもが、自分の生き方についての考えをより深めていくことができると考える。
- 授業実践から、教師の指導を振り返る視点を明確にし、自分を見つめ、よりよい生き方についての考えを深める道徳科授業を充実させていく必要がある。

付記

本報告は、鹿児島大学教育学部附属小学校令和元年度研究紀要で発表した研究内容等に基づき、その研究成果をまとめたものである。